

原発性マクログロブリン血症，クリオグロブリン陰性で APTT 測定不能を示した 1 例

◎伊奈野 尚之¹⁾、萩原 祐至¹⁾、森島 英和¹⁾
西日本旅客鉄道株式会社 大阪鉄道病院臨床検査室¹⁾

【はじめに】活性化トロンボプラスチン時間(activated partial thromboplastin time; APTT)は血液凝固のスクリーニングテストとして日常の臨床検査に用いられる。クリオグロブリン(以下、Cryo)は形成する免疫グロブリンの組み合わせにより I 型～III型に分類され、I 型は多発性骨髄腫や原発性マクログロブリン血症に多くみられることが知られており、凝固検査に影響を及ぼす。今回我々は原発性マクログロブリン血症で Cryo が陰性にも関わらず APTT が測定不能を示した例を経験したため報告する。

【症例】70 歳男性。20××年胃体部癌に対し化学療法施行。以降胃癌術後フォローのため当院外科に通院。定期受診で易疲労感、貧血を認め、血液検査で貧血進行と総蛋白上昇、A/G 比低下を指摘され当院血液内科を紹介となった。

【検査所見】RBC 272×104/μL, Hb 8.9 g/dL, Hct 26.6 %, TP 11.5 g/dL, Alb 3.4 g/dL, A/G 0.4, IgM 7,795 mg/dL, PT 13.7 秒, APTT 測定不能(No Coagulation), β2MG 3.8 mg/dL, Cryo 陰性, 第VIII凝固因子 44%, 第IX凝固因子 51%, 第VIII因子インヒビター(-), 第IX因子インヒビター(-), VWF:RCoF 52%,

クロスミキシング試験:欠損パターン

【APTT 精査】 [機械法] トロンボチェック APTT-SLA(現行試薬;シスメックス); 測定不能, レボヘム APTT SLA(検討試薬;シスメックス); 37.6 秒。

[用法] トロンボチェック APTT-SLA(現行試薬; シスメックス); 44 秒(混濁あり), レボヘム APTT SLA(検討試薬; シスメックス); 43 秒(混濁なし)。

機械法での APTT 測定不能の原因は試薬混濁によるものと考えられた。

【まとめ】 原発性マクログロブリン血症で Cryo 陰性にも関わらず APTT 偽延長を経験した。

APTT 偽延長は試薬混濁が原因と考えられた。現行試薬と代替試薬の並行検査により正確な結果を主治医に報告することができた。APTT が測定不能の原因はヘパリン混入や検体凝固、Cryo などが挙げられるが、本例のように特定の試薬と検体との反応により混濁を認め測定不能になることも念頭に置いて検査する必要がある。

連絡先：06-6628-2221